

みずちどりほろふくろく

蛟堂報復録3

鈴木麻純

Masumi Suzuki



地獄の沙汰も金次第――

業^{ごう}を背負^うう覚悟と金があるのなら――

その恨み、蛟堂^{みずちどう}に預けてみませんか？
悪いようには致しません。

「一週間以内に、」

――必ずや片を付けてみせましょう。

蛟堂店主 三輪^{みわ}辰史^{とせふみ}

目次

第一話 ヘンゼルとグレーテル

7

第二話 隅田川

143

第一話 ヘンゼルとグレーテル

私は、ひたすら逃げていた。

いつもより一回り程小さい——小学生か、中学生くらいの——体は、私にその状況が現実ではないことを教えている。けれど、その動かし難い手足を必死にばたつかせて、〈私〉は闇に塗りつぶされた黒の道を走っていた。

タ、タ、タ、タタタ——

誰に追われているのか判らぬまま、ただ走っていた。

何処へ向かって逃げていいのか、何故逃げねばならないのかも分らない。けれど本能が私に「逃げろ」と急かした。急かされるままに、私は足を動かすだけだった。

——逃げなければ。

逃げなければ。逃げなければ。

どちらへ？

どちらでもない。ただ、真っ直ぐ。

私は真っ直ぐ走り続けた。道なき道を、走っていた。不思議と足は疲れなかった。このままどこまでも走ってゆけるような気すら、したのだ。

——目の前に広がる池が、行く手を阻んでいなければ。

黒々とした道は目の前でふつりと途切れ、そこから先は更なる闇が広がっている。周囲の黒を映してゆらゆらと揺れる闇だ。少しでも足を踏み入れれば、そのまま引き擦り込まれてしまいそうな錯覚さえ起こさせる、深い深い闇だった。

波紋の広がる黒々とした水面を私はじっと凝視した。

どろり。

透明なはずの水は周囲の闇を含んで暗く、恐ろしい化け物のように見えた。

波紋が広がるのは、風の所為ではない。

「ああ……あ、あ、あ……」

私は初めて声を上げた。

底の見えない池の中央からは白い手が一本。暗闇の中にあって、その手はほんのりと光を放っているようにすら見える。それがまるでおいでをするように、私に向かって助けを求めている。

——決して、来いと手招きしているのではない。〈彼女〉が助けてくれと悲痛な叫びを上げていることを、私は知っていたのだ。

波紋が広がる。悲鳴を私に伝えようとしているかのように、足元へ寄せ来る小さな波が私の靴を

とぷりと濡らした。

手の周囲には、ごぼり、ごぼりと気泡が浮かんで消える。

「助けて、助けて」

沈みゆく〈彼女〉の聞こえぬはずの声私の胸を酷く掻き乱した。

水の中の〈彼女〉が必死に訴えているかのように体の周りで激しく泡立っていた気泡は、次第にぼこり、ぼこり、と頼りないものへと変わってゆく。

——ああ、けれど、私はついにそこから動くことが出来なかったのだ。一歩たりとも。腕を上げ、伸ばすことすらできなかったのだ。

（お母さん——）

ぼこり……。ぼこり。

真つ黒な水面から覗くのは、既に細い指先だけだった。

やがて、浮かんでは無為に割れるばかりであつた気泡もついには途切れて、いつでも髪を梳いてくれた優しい指先も漆黒の水中へと沈んだ。

残った小さな波紋だけが足元で〈彼女〉——母が助けを求めていた事実を示している。

過去の私は、何が起こったのかを理解してその場にべたんと尻餅をついた。

「お兄ちゃん、助けて！ 助けて！」

ああ、助けを求めていたのは母であつたというのに。私は恐怖に泣きじやくりながら兄の名を呼

んだ。

「お兄ちゃん！ 洋ちゃん！ 助けて！」

誰よりも頼りになる兄だ。誰より頼りにしている兄だった。

しばらくそうして一人で泣いていると、不意に背後に人の気配が生まれた。

（お兄ちゃん！）

安堵しながら振り向こうとした私の肩を、ひんやりとした手が掴んだ。長い爪が、決して離すものかともいう風に私の柔らかな肩に食い込む。

——違う。お兄ちゃんじゃない。

追いかけていた事実を思い出した私は体を硬直させる。目の前には静まりかえった池。明かりはない。どこにもない。

コールドタールのように真つ黒な水面は背後の〈誰か〉はおろか、自分の姿さえ映してはくれない。

耳元で艶めいた笑い声が聞こえた。

ふふふ、と。魔女のように美しく邪悪な笑い声だ。

（後ろを見ちゃだめ。食べられちゃう）

頭の中で何度も念じて、己の体に言い聞かせる。そうしなければ、声に誘われた己の体が魔女の呼ぶままに後ろを振り返ってしまうであろうことを知っていた。

——けれど、いつだって、抗うことなどできないのだ。

ぎぎぎ、と油の切れた機械のようなぎこちない動きで私は振り返る。
そこには三日月のようににんまりと微笑む眸があった。

村松美樹はベッドの上で目を覚ました。薄い掛け布団が半分、床へ落ちてしまっている。薄桃色のカーテンの微かに開いた隙間から漏れる光が眩しい。

じつとりと額に浮かぶ汗を手の甲で拭いながら上半身を起こした美樹は、一度眸を瞑り目蓋を上からそと押さえた。

——暗い夢から急に覚めた所為か、目の奥がちかちかとする。

目蓋の上から射す光は、夜明けを告げている。再び薄く眸を開けて机上のデジタル時計に目を向ければ、六時五十九分。アラームが鳴る寸前で目を覚ましてしまったらしい。

美樹は床に足を降ろすと立ち上がり、ぐいっと一つ伸びをした。

——うん！

肺腑一杯に息を吸い込み、まずは悪夢に高なる鼓動を静める。背筋をしゃんと伸ばせば、まだ夢と現の狭間を彷徨っていた意識が覚醒し、ようやく爽やかな朝の訪れを感じることができた。

鳴る前のアラームを切り、カーテンを開ける。部屋に光が満ちてしまえば悪夢はただの夢へ変わ

り、美樹は口元へ小さな苦笑を浮かべた。

もう何度見たか知れない悪夢だ。

最初にあの夢を見たのは、七年近くも前である。「七年、か」思えばあれから随分と時が経ったものだ。

口の中で呟いて、美樹が寂しげに眸を伏せたその時に、階下から、

「美樹ちゃん！」

と女の声と呼んだ。

「美樹ちゃん、朝よ」

「着替えてからすぐに行きます」

声に素っ気なく答えて、ベッドの上へパジャマを脱ぎ捨てる。クローゼットの中から適当に服を見繕って袖を通し、鏡の前で確認。悪くない。

寝癖だらけの髪を気にしながら、美樹は部屋のドアを開けた。階段を下りようとして、何かを思い出したようにまた戻る——シン、と静まりかえった隣の部屋のドアを開ければ、一つ年上の兄はまだベッドの上で眠りこけている。

「お兄ちゃん。お兄ちゃんってば。朝だよ」

兄——洋は妹の声に「ううん」と眠たげな唸り声を上げた。

目蓋がびくり、と微かに震えて持ち上がる。

「おはよ、美樹」

「おはよ。お兄ちゃん、今日は午後からだっけ？」

「あ？ ああ。でも、美樹が行くなら俺も一緒に出るよ。あの人と二人きりだなんて気まずいからね」

眠たげな半眼を擦^{こす}っていた洋は、ふうと寝転がったまま肩を竦^{すく}める真似をしてみせた。

「俺も着替えて行くから。美樹は先下りてて」

「うん」

頷^{うなず}いて、階段を下りる。

リビングにはいつもと変わらぬ朝の風景が広がっている。

もう朝食は済んだのだろう。食器を重ねて新聞を読み耽^ふっている父と、そんな父の弁当を作っている母。

尤も、彼女——恵子^{けいこ}は美樹の実母ではなかった。実母が亡くなった後に、父である貴志^{たかし}が迎えた後妻である。

貴志が新聞から視線だけを上げて、「お早う、美樹」と言ったことで、恵子も美樹が下りてきたことに気付いたようであった。フライパンの中で忙しく菜箸を動かしながら、

「美樹ちゃん、お早う」

振り向きもせずに、声だけは猫撫^なで声で言う。美樹は「お早うございます、恵子さん」そう小さ

な声でぼそぼそと呟^{つぶや}きながら椅子を引いた。テーブルの上にはすっかり冷えて固くなったトーストと、目玉焼き。

貴志の朝食と併せて作ったのだろう。

「自分でやるからいいって言ったのに」

美樹は口の中で呟^{つぶや}いて、グラスに生温^{なまめ}くなった牛乳を注ぐとトーストにジャムを塗^ぬりたくった。が、と固く歯切れの悪い食感に顔を顰^{しか}める。

（まあ、もう慣れたけどね）

半分ほど食べたところで、着替えを終えた洋が欠伸^{あくび}を嚙^かみ殺そうともせずにキッチンに入ってきた。

まだ半分寝惚^{ねぼ}け顔の兄は、美樹の向かい側の椅子を引いてそこに座る。冷たい朝食に溜息^{ためいき}を吐き出して、やはり美樹と同じように諦めたようにジャムへ手を伸ばす——それが、今やもう日常と化した村松家の朝だった。

空は青い。

千切られたような白い雲がぽつり、ぽつりと浮かび、流れてゆく。まだ昇りきっていない朝の太陽は、白々とした柔らかな光を放っている。

都心から電車で二時間程の距離にある、小さな街。交通の便があまりよくない所^せ為^いか、人口密度

はそれほど高くない。地味で目立たない印象を与えるが、住みやすい穏やかな場所だ。
美樹と洋は駅に向かう道を歩いていた。

二人の通う大学は、都心に近い。毎日往復四時間弱、電車で揺られて通い続けるのは正直な話、楽ではない。友人らから「もう少し近い場所で一人暮らしすれば？」と提案されることもしばしばである。

それでも二人は家への心残りから、この街を出ることができないのだった。

家からほんの三百メートルほどのところに、大きな公園がある。木々に囲まれた広い池はボート乗り場が設けられており、池の周辺からアスレチック広場に向けては遊歩道が続いている。

公園の前で、美樹は足を止めた。

「どうした？」

先を歩いていた洋が振り返る。

「早く行こう。遅れるよ」

ほんの少しだけ顔を歪ませて、洋は優しく促したが、腕時計の針はまだ十分な時間があることを示している。

美樹は知っている。

洋はこの公園が好きではないのだ。

「お母さん……」

美樹は兄に聞こえぬよう、小さな声で呟いた。母、とは恵子のことではない。亡くなった実母のことだ。

この公園こそ、優しくった母を亡くした場所であった。

それはもう七年も前の話だ。

美樹はその寒い冬の夜を脳裏に思い描いて、ほうと湿った吐息を吐き出した。

貴志は仕事で、家には当時中学生だった美樹と洋の二人きりであった。母——恵子ではない。実母の香奈子は夕方頃に、

「大学時代の友達と会ってくるから」

と二人の夕食を作って家を出たのだった。

特別変わったことなどない。ごくごく普通の会話を交わし、母を見送った二人はその日が忘れられぬ日になるうとは思ひもなかった。

「お母さん、遅いね」

時刻は既に二十二時を回っていた。

——二十一時には帰ると言ったのに。

父が仕事で遅いのはいつものことだが、普段家に居る母の存在がないのは、どうにも落ち着かない。

香奈子は几帳面で生真面目な母親であった。子供たちとの約束を違えたことは無かった。

——久しぶりに会った友人らと羽目を外したせいで、連絡を忘れてしまったのか？

美樹は自問して、首を小さく左右に振る。

「お母さんらしくないよね」

母の性格を知っているからこそ、不安だった。

「もしかしたら、近くまで来ているのかもしれないよ。少し外に出てみようか」

見かねた洋の提案で、二人は外へ母を捜しに行ったのだ。

夜風が冷たい。凍える空には青白い月が仄かな光を放っていた。小さな星明かりが、明るい街灯に掻き消されて、存在を無くしている。そんなどこにもある夜。

人気の少ない道路を、兄妹は街灯に添うように歩いた。胸騒ぎと不安が、二人から言葉を奪う。仲が良すぎる、と言われる兄妹にしては珍しいほどにその時の二人は無言だった。

公園に入り、池を囲んだ遊歩道を歩く。公園を挟んだ向こう側の地区は、商業施設が多く建ち並んでいる。母が友人らと会っているのは恐らくその辺りだ。公園をぶらぶらしていれば、きっと行き会うに違いない——と。二人はそう思ったのだ。

池の中央部に架けられた小さな橋近くへ差し掛かったところで、洋が何かに気付いたように駆け出した。

兄に置いて行かれた美樹は、慌てて後を追って走り出す。

「お兄ちゃん!」

けれど、洋は答えなかった。

群青の夜空を映した暗い水面が——本来は静かであるはずの水面が、ばしゃばしゃと音を立てて荒れていることに美樹が気付いたのはそれからすぐである。

公園の仄暗い外灯が、暗い水面を僅かに明るくしている。

魚が跳ねているのか？

否である。猫や犬が溺れているわけでもない。水面からは覗くのは、紛れもなく人間の手であった。

何かを掴もうとしているかのように、白い手が生え暴れている。時折水面に顔が浮き上がり、必死に助けを求めている。

茶色がかった長い髪。腕に張り付く服の色には見覚えがあった。普段は優しい目元が、今は恐慌に彩られている。

そうやって溺れているのが母であるのだと気付いた瞬間に、美樹はその場に腰を抜かしてしまった。

——お母さん!

動揺が全身を貫く。動転した脳内からは母を助けなければという思いなど容易く弾け飛んだ。残っていたのは「どうすれば」という狼狽だけであった。

「ど、どうしよう！ お兄ちゃん！」

「美樹、落ち着いて。大丈夫。俺がついてるから」

腰を抜かしたまま泣きじゃくることしかできない妹とは対照的に、兄はすぐさま池に架かる小さな石橋の上へ登り、そこから母を助けようとしていた。が、いくら体を這い蹲らせ、腕を伸ばしてみたところで母に届くはずもない。

——このままでは、母が！

頭で結果を予測するよりも先に、急かされたように水中へ飛び込んだ兄を見て、美樹は悲鳴を上げた。

水底は黒く濁ってその深さを不明瞭にしている。驚くほど深い、ということもないだろうが昼間はボートの貸し出しを行っているくらいである。着衣のまま飛び込み、溺れた大人一人を助けることが出来るほど、その水深が浅いということもないだろう。

暗い水中にはゆらゆらと漂う母の服の影——そこへ洋の姿が重なった。

激しくもがいた所為で、母は体力を奪われてしまっているようである。まして、十二月。冬だ。水中の冷たさを想像して、美樹は激しく泣いた。

——このままでは、兄も、母も死んでしまう。

案の定、水の冷たさと服の重さで、洋は水中で身動きを取ることができないようであった。手は母の腕を掴んではいるが、その体を引いて岸まで辿り着くことは、まだ中学生の洋には無理な話で

あった。

「美樹……！！」

寒さに顔色を失った兄が、必死に口をばくばくと開閉させているのを見て、美樹はようやく近所に助けを求めることを思いついたのである。美樹は、一つ頷くとその場から駆け出した。まるで二人を置いて逃げ出すような——そんな後ろめたさと不安に駆られながらも近所の家へ駆け込み、泣きながら事情を話したのである。

そうして十数分が経った頃に救出され、兄と母は病院へ搬送された。兄は、無事であった。命に別状もなかった。寒さに凍えてはいたが、水に浸かっていた時間はそれほど長くはない。

しかし、母は——。当然のことながら、洋よりあの冷たい池の水に浸かっていた時間は長い。

また、溺れながらも必死に助けを求めようとしたのだろう。水を大量に飲んでしまっていたようである。誤嚥した水が肺に溜まり——結果、帰らぬ人となった。

——それからだ。夢を見るのは。

あの夜とは対照的に、陽光を反射してきらきらと輝く水面を眺めながら美樹はぼつりと呟いた。ただ泣き喚くことしかできなかった頼りない娘を、母は責めているのだろうか？

「そうかもしれない」

母を助けようと必死だった兄の姿と、何もできなかった自分の姿。夢に見る二人の子供を比べれば——当事者であるからか——過去の自分が酷く薄情だったように思える。

その後――

両親共通の友人であった恵子が、妻を亡くしてすっかり元気を無くしてしまった父を支え、美樹が高校へ進学した頃に二人は再婚したのである。

表情を暗くする美樹の手を、洋が引いた。

「お兄ちゃん……」

「また母さんのことを思い出しているのか？」

眉尻の下がった悲しげな顔が、美樹を覗き込む。後悔の浮かぶ瞳だ。

「ごめんな。俺がすぐに助けを呼ばなかった所為で」

そうではない。そうではないのだ。

美樹は首を何度も左右に振った。悪いのは、兄ではない。助けることできなかったものの、兄は必死に母を助けようとした。中学生の洋には、あれが精一杯だったのだ。責められるべきことなど、一つもない。

（私なんて、何もできなくて泣いてただけなもの）

美樹は、ほうと溜息を吐き出す。

むしろ責められるべきは、臆病な自分の方なのだ。

七年という長きに渡り、あの夜の夢を繰り返し見るのは、母が自分に何かを訴えたがっているか

らではないのか――美樹はそう思うことがある。

母の死に際して、泣くばかりであった情けない娘を心配しているのか。或いは恨んでいるのか。

「行こう、お兄ちゃん。遅れちゃう」

考えるのも憂鬱になって、美樹は兄の手を握り返す。

「あ、洋！ お早う。それに、美樹ちゃんも」

大学のエントランスホールへ足を踏み入れた二人にそう声をかけたのは、人懐こい顔をした青年であった。

くせの強い襟足が、後ろへひょこんと跳ねている。癖なのだろうか、右手の人差し指でその跳ねた襟足をくるくると弄りながら黒子のある口元を大きく綻ばせた青年の名は名島瑠璃也。

洋のクラスメイトで、友人だ。

「お早う、瑠璃也」

洋が親しげに返し、そのまま「あれ？ 太郎は？」と姿の见えないもう一人の友人の行方を問う。

「うん？ 太郎ちゃん？ ああ。今日は休みだよ。店番頼まれたんだって」

「例の叔父さんに？」

「そ。大して客来ないのにな。可哀想に」

瑠璃也は他人事のようにけらけらと笑った。

岡山太郎——彼も、洋の友人の一人だ。瑠璃也とは中学校からの付き合いで、休日などもよく連（つ）んでいるようである。現在は両親が海外へ赴（み）いていて、蚊（みず）堂（どう）という怪（あや）しげな店を営（い）む叔父（じふ）の許（もと）で居候（いそうこう）をしているらしい。

この叔父、というのが——瑠璃也や太郎に話を聞く限りでは——どうも人格的に問題のある人物のようで、太郎はしばしば店番を頼まれ講義を休むことがあった。……休むというか、休まされるというか。

けれど、洋は瑠璃也の言葉を聞くとにやりと笑った。

友人のことをネタにして笑っている瑠璃也の方こそ、太郎以上に単位の取得状況がまずいという事実を知っていたのである。

「お前だって、よく客の来ない古書店で店番させられてるだろ？」

瑠璃也のバイト先は古書店である。漫画などを主に売買するチェーンの古本屋ではなく、個人が経営する小さな店だ。その古書店は偶然にも太郎の叔父が経営する店の隣に建っているらしい。店主は、やはり太郎の叔父に負けず劣らず良い性格をしているようで、瑠璃也は彼から急な呼び出しを受けては慌ててキャンパスを飛び出してゆくのだった。

洋の容赦ない指摘に、瑠璃也は顔を引き攣（く）らせる。

「それを言うなって。せめて授業のない日だけにしてくださいって交渉はしてるんだから」

「単位を金で売る交渉だろ？」『瑠璃也の奴、時給の値上げを条件にあっさり折れたらしいよ。よっ

ぽど単位がいらないみたいだ』って、お前の可哀想な親友が話してたぜ」

「ああもう、太郎ちゃんは何でそういうこと人に言うかなあ！　まるで俺が授業さぼってバイトばっかしてるみたいじゃなか」

「というか、事実その通りだろ」

洋と瑠璃也は顔を見合わせて笑しげに笑った。洋の隣で二人の会話を聞きながら、美樹も笑う。こそり、と横目で洋の顔を窺（うかが）えば、その瞳からは今朝見せた悲しみは消えていた。明るい笑みに、美樹はほっと胸を撫（な）で下ろす。

「それよりさあ、今度の授業で——」

——こうやって笑うことができるのは、学校にいる間だけだ。

貴重な時間を惜しむかのように、始業を告げる電子音が鳴るまで三人はそうして下（くだ）らぬ話に盛り上がった。

男はふらりと通りがかった雑貨屋の前で、ふと誰かに呼ばれたような気がして足を止めた。黒髪を後ろへ撫（な）でつけた、どこか不遜な雰囲気（まじ）を纏（まと）った男である。薄青色のワイシャツの上からだらしなくスーツの上着を肩に掛け、気怠（きだ）げな視線をショーウィンドウに向けている。

顔立ちは、よく見れば端正である。よく見なければそうと判らないのは、パーツの一つ一つから滲み出る彼の性格が、彼から「美形」という言葉を奪っているからだ。

自信に満ちた眸は同時に他人を見下しているようでもあり、眉間には癖であるのか僅かに皺が寄せられている。引き結ばれた薄い唇は酷く冷たそうで、ついと上を向いた顎など極めつけであった。つまり、

——傲慢で高圧的。自信過剰。強欲的。

もう一つおまけに単語を加えるとするなら、自己愛主義者。

男の顔に視線を向けた人間は、皆等しくそんな感想を胸に抱くことだろう。

内面の毒々しさを隠しめせず、清々しいまでに全て顔へ出しきった男の名を三輪辰史という。

彼は、依頼を一つ片付けた帰りであった。

辰史は祖父から継いだ〈蛟堂〉という店を営むその裏で、報復屋をしている。

蛟堂という店自体は、漢方薬や札、香といった需要があるのか判らないものばかりを売る漢方薬局を兼ねた雑貨屋である。

——その蛟堂が、何故報復屋などという物騒な裏の顔を持っているのか？

三輪、という一族がある。

歴史の闇に存在していた異能者たちの間でも、近年に至るまで特に目立つことのなかった一族

だ。系図を紐解けば、始祖は平安時代にまで遡りながらも、最初にその名が歴史書へ現れたのは安土桃山時代である。その際の役職は神頼み——星を読み天候を読み、戦の吉凶を占う。つまりは、陰陽師のようなものであった。

陰陽師とは確かに特異な存在ではあるが、古の時代においては現代ほどに特殊な職業ではない。

その上、三輪一族には安倍晴明や蘆屋道満のような知名度を持つ者は誰一人としていなかった。異能者としての力はあるが、その芸の幅が広すぎたというのが三輪一族を民間の異能者たちの間へ埋もれさせていた原因である。

——修験者、市子、薬師、神頼み等々。

持って生まれる才能は特殊であるが、まとまりがない。

例えば、三輪と同じ異能者の一族に高天という家がある。高天一族は狐憑きとして有名で、稲荷神の眷属である白狐をその影に宿して生まれた一族の子供は神子と呼ばれる。

では、三輪一族は？

かつての三輪一族は、大雑把に「異能者の一族」としか答えることができなかったのである。

次に生まれてくる子供が親と同じ才能を有しているとも限らない。代を重ねて才能を育てることが困難な一族だったのだ。

そんな目立たぬ一族が、頭角を現す切っ掛けを作ったのが初代蛟堂店主、三輪長流である。

江戸時代も半ばを過ぎて、政権の安定とは裏腹に不況と腐敗が蔓延していた時期——義賊が流行

りだしたのが丁度その頃。

長流は正義感溢れる人物であつたと同時に、独創的でもあつた。昔から変わらぬ神子^{みこ}の一族として裏の世界で幅を利かせる高天家や、他の異能者一族のように公家や武家に取り入ることはせずに、その力を市井へと向けたのだ。

物に宿る人の想いで、人を裁く——そのような報復の方法があると思ひ至つた人間が長流の他に存在しようか。

世間の流行り廃りに関係なく、恨みという人間の感情のみは常に在り続けるものである。報復屋という特殊な基盤を得た三輪一族は急成長を遂げた。更に勢いを付ける為に、力を求め始めたのもこの頃である。

三輪一族の全てが一流である必要はない。ただ、一族を率いる総領となるべき一人が、偉大であれば良い。——と、その一人の存在を確実なものとする為に、随分と無茶な婚姻も繰り返されたようである。

その結果得たのが、現在の繁栄と「報復屋の一族」という位置付けだつた。

尤も、時が経つにつれ、その報復も随分と性質を異^{こと}にしてきていたが——

理不尽で横暴な強者に泣く泣く屈さねばならぬ弱きを助ける——というのが初代店主の意向であつたらしい。が、時代を経て身分制度が無くなると、義賊的な面は薄れ「晴らすことの出来ぬ恨みを引き受ける」という報復屋としての側面ばかりが残つてしまった。

（皮肉なのは、義賊よりもただの報復屋の方が民衆に受けたことだ）

近世になればなるほど、依頼の多くなる裏の商売を思つて辰史は、ふんと鼻を鳴らした。

この仕事に不満があるわけではない。が、立て続けに依頼が重なるというのも困りものである。趣味の骨董市巡りもままならないし、何より恋人と逢う時間がない。

——ああ、今頃あの恋人は仕事に没頭する傍らで、自分からの連絡がないことを酷く寂しがつているに違いない。

いつもは依頼を終えると店でのんびり暇を持て余す辰史が、真つ直ぐ帰らずに駅近くのショッピング街へ足を向けたのも、そんな風に恋人への勝手な妄想で胸を痛めてのことだつた。

（どれだ？）

——ショーウィンドウ越しには、何が自分を呼んでいるのか判らない。

自動ドアを潜^{くぐ}る。

ふむ、とすらりと伸びた指を顎へ当てながら、辰史は店内を見渡した。

雑貨屋といつても、色気もなく用途不明なものばかりを置いている〈蛟堂〉とは随分と様相の異なる、所謂ファンシーグッズの店だ。

店内には女性客が多い。きらきらとしたアクセサリーや、キャラクターグッズ、洒落た生活雑貨などが棚を占めている。

——凡そ、自分が足を踏み入れるに相応しくない可愛らしい雑貨店だ。

と、些いさが辟易へきえきしながら柵の間に視線を彷徨さまよわせていた辰史は、一つのスノードームに目を留めた。木の切り株をあしらった台座に載る透明で丸い球体の中には、ビスケットやチョコレート、キャンディなどで作ったのだと思わせる小さな家と手を繋いだ男児と女兒の人形が収められていた。

球体の中では七色に輝くラメが舞う。

『『ヘンゼルとグレーテル』か』

辰史は呟つぶやいた。

——間違はなく自分を呼んだのはこれだ。

(スノードームか。少し可愛すぎるが——)

「比奈ひなが気に入れば、くれてやってもいいしな」

考えてみれば、あの古びた蛟堂よりも比奈の綺麗な部屋の方が、このスノードームを置くに相応しい気がする。

コレクションに加える新たな思念と、恋人宅へ押しかける口実を見つけた辰史は上機嫌に唇を緩めた。

隣では甥と同じ年頃の娘が辰史と同じくスノードームを見つめ、買おうか買うまいか迷っている風であったが、横から手を伸ばし、スノードームを攫さらう。

「あっ」

と、女子大生が小さく声を上げたのが聞こえたが、知ったことではない。

(こういうのは早いもん勝ちだ。早いもん勝ち)

ふふん、と鼻歌交じりに足取りも軽く、辰史はレジへと足を向けた。

(あー……)

美樹は男の後ろ姿を恨めしげに見送った。

講師の都合で、午後一番の講義が早めに切り上げられたのだ。

続けて取っている次の講義までは、まだ四十分ほどもある。同じように、時間の空いている友人はいないかとラウンジへ足を運んだ美樹は、そこで同じように暇を持て余す瑠璃也を見つけたのだった。

「瑠璃也さん、お暇ですか？」

「あ、美樹ちゃん。うん。俺、午後一には何も講義取ってないんだ。こういう中途半端な時間って困るよなあ。いつもは太郎が一緒だからまだマシなんだけど」

「じゃあ、私とお茶に行きませんか」

そう誘いかければ、瑠璃也は二つ返事で頷うなずいた。

授業の合間に瑠璃也と出かけるのは、それが初めてではない。
友人の妹であるからか、瑠璃也は美樹に対しても友好的だ。

どこか抜けていて頼りない部分もあるが、根が世話好きなのだろう。お茶や食事に誘ってくれることもしばしばである。

「ちよつとそこの雑貨屋見てもいい？ ブックスタンドが欲しくてさ」
カフェに向かう途中にある雑貨屋の前で、瑠璃也が足を止めた。

「いいですよ」

男子大学生が入るには、その雑貨屋は少し可愛すぎるのではないかと思ったが、美樹は敢えて口に出さずに頷いた。

そうして、瑠璃也が目当てのものを探している間にふらふらと棚の間を歩き来していた美樹の目に留まったのが、一つのスノードームであった。

外に面したガラス棚に飾られている所為か、陽光を浴びたそれは輝いて見える。

球体の中にはお菓子の家と、手を繋いだ二人の子供。

『ヘンゼルとグレーテル』か」

美樹が呟くより早く、隣からそんな声が聞こえた。ふつと視線を向ければいつからそこに居たのかスツ姿の男が一人、立っている。

彼はすらりと伸びた指先を顎に添え、値踏みをするようにスノードームへ視線を注いでいた。

（何か、怖そうな人）

美樹はスノードームに手を伸ばそうか迷ったまま、少しだけ体を男から離れた。

男はそんな美樹の様子に気付いていないようで、何やらぶつぶつと呟いている。

「比奈が気に入れば、くれてやってもいいしな」

そんなことをぼつり、と呟いた男の手が横からすつと伸びた。

「あつ」

と言う間に美樹の目の前からスノードームが消える。

「どうしたの？」

ブックスタンドを片手に持った瑠璃也が棚の間からひよこつと顔を覗かせた。瑠璃也に聞かれるほど大きな声を上げてしまったことに気付いて、美樹は口元を押さえる。代わりに悔しそうに顔を歪めて、

「いえ、ね。すごく可愛いスノードームがあつたんですけど、目の前で持って行かれちゃって。迷ってないで手に取っちゃえば良かったなって」

欲しかったのに。そう、口に出してみると余計にあの男に先を越されてしまったことが惜しくなる。

「また入荷されるかもしれないし、そんな顔しないでよ。俺がアイス奢ってあげるから機嫌直して」
宥めるように言って、瑠璃也は苦笑した。子供っぽい、と呆れられているのかもしれない。美樹

は瑠璃也の苦笑にそんなことを思っ、口を嚙む。

「い、いいですよ。そんなこと言っ、いつも瑠璃也さんが奢^{もて}ってくれるじゃないですか」
代わりにそう返せば、瑠璃也は「そう？」と惚^{とほ}けるように言った。

「ま、今回は俺の買物に付き合ってもらっただしね。お礼くらいはさせてよ。美樹ちゃん」
さ、行こう。と腕を引かれるままに店を出る。

(……強引)

胸の内ですんな風にはやいたのは、決まりの悪さを感じたからだっ。自分の手を引いて歩いてゆく兄の友人。いつでもにこにこ笑っ、その呑^{のん}気さを洋や太郎に呆^もれられているような瑠璃也だ。背も、兄ほど高くない。けれど、その後ろ姿に何となく頼もしさを覚えてしまったのだ。

——何故^{なぜ}か。

思えば兄にべったりで、恋愛らしい恋愛をした覚えはない。母が亡くなっからの美樹の視線は家の中にばかり向いていて、友人らと遊んでいても心はどこか上の空だっ。

(瑠璃也さん、かあ)

瑠璃也に連れられて入ったアイスクリームショップの店内は、人もまばらだっ。空いた席に向かい合っで腰掛けて、頼んだアイスを受け取る。

甘党の瑠璃也はチョコチップとガナッシュのふんだんに交^まじった見るからに甘そうなチョコレトアスを、幸せそうに舐^なめている。

(顔は普通だけど、優しいんだよね)

美樹はぼんやりと瑠璃也の顔を眺めたまま、ストロベリーアイスに口をつけた。

「ん？ どうかし？ 美樹ちゃん」

視線に気付いたのか、瑠璃也が顔を上げる。

「い、いえ」

「何か困ったことでもあるの？」

——何でもないです。

答えるより先に、そう訊^{たず}ねられて美樹は続けるはずだった言葉を飲み込んだ。

瑠璃也は「ん？」と首を傾^かげて美樹の返事を待っている。

「私、よく見る夢があるんです」

「よく見る夢？」

問い返す瑠璃也に、美樹は首を縦に振る。頷^{うなづ}いてストロベリーアスを舌先で掬^{すく}う美樹に、瑠璃也は先を促した。

「どんな？」

いかにも興味津々、といった風に。

その夢の話は兄にさえしたことがなかった。夢を見るようになった切っ掛けは、分っている。母の死だ。

「俺が母さんを助けられなかったから」

話せば、兄はいつものように自身を責めるに違いない。

洋の口からその台詞を聞くのは辛かった。かといって友人などに言ってみたところで、

「たかが夢でしょ？ 気にしすぎだよ」

と一笑に付されてしまいそうな夢の内容を、何故兄の友人である瑠璃也に話そうと思ったのか

（瑠璃也さんなら、笑わないで聞いてくれるんじゃないかって）

名島瑠璃也は少し変わった人間だった。一見、特別なところなど何一つ無いように思われる。親友であるという岡山太郎のように顔が良いわけでもなければ、頭が良いわけでもない。今朝、洋にからかわれていたように、バイトに精を出しすぎて学期末には「単位が！ 単位が！」と単位の取得に奔走しているような何の変哲もない大学生である。

——では、何がその雰囲気獨特のものにしているのか。

（人懐っこくお喋り好きで、他の人間よりもほんの少し人が好いその性格、かな）

瑠璃也は普段と変わらぬのほほんとした顔つきで美樹が話し出すのを待っていた。

美樹は口を開く。

「夜道で、誰かに追われている夢なんです。誰に追われているのかは判らないんですけど、足音だけが背後から聞こえてきて、中学生くらいの私が必死に逃げているんです」

「誰かに追われている夢……」

反芻する瑠璃也に、美樹は頷いて続ける。

「それで、気付けば目の前に池が広がって……」

——そこでは母が溺れているのだ。

「うちの母、七年前に亡くなったんです」

言うべきか迷った末に口にすれば、

「ああ、それで」

瑠璃也は「成程」と首を縦に振った。

「何が、成程なんですか？」

「洋のやつさ、自分の親のこと話すのに『恵子さん』ってやけに余所余所しい感じで呼ぶから。何でだろうって思ってたんだよね」

こういう経緯で親の話をするに至ったのか美樹には分らないが、洋の口から恵子の名だけは聞いたことがあるらしい。

美樹の話を聞き終えて、瑠璃也はしばらく思索していた。まるで自分の記憶から似たような事例を思い起こそうとしているかのように、真剣な瞳をテーブルの上へ向けていた。

手に持っていたアイスが溶けて、指先へ流れる。その冷たい感触で我に返ったのか、

「夢かぁ。現実だったらいくらでも説明はつくんだけどな」

小さくそう言った。見慣れない真剣さの消えたその顔は、今は途方に暮れている。
「はい？」

——現実？

「現実だったら説明がつくって、どういう意味ですか？」
問い返せば、瑠璃也は慌てたように「いや、夢って難しいねって話。夢占いにもいろいろ解釈があるしさ」と捲し立てて指先に垂れたアイスを舐めた。

「俺じゃあ何も判らないけど、そういうのに詳しい知り合いがいるんだ。相談してみるよ」

瑠璃也の申し出に、美樹は戸惑う。

「でも、ただの夢ですし——」

——そこまでもらうわけには。

本来ならば「それってトラウマか何かじゃない？」で終わるような話だ。

瑠璃也に「そういうのに詳しい」知り合いがいることにも驚きだが、たかが夢の話に真剣に付き合ってもらうことに今更ながら申し訳なさと——若干の気恥ずかしさを感じて、美樹は体を後ろに引いた。

——そうだ。自分はただ話を聞いてもらいたかったただけなのだ。悪夢の解明をしたいわけではなく、悪夢をただの夢であると一緒に笑い飛ばして欲しかったただけなのだ。

(なのに、何で……)

瑠璃也は笑わなかった。

気の所為だよ、などと笑い飛ばしはしなかった。代わりに柔和な目元を綻ばせて、「でもさ、美樹ちゃん」と穏やかな口調で続けた。

「七年も見続けてるってことは、きっと何か意味があるんじゃないかと思うんだ。美樹ちゃんも内心では気になってるから俺に話したんでしょ？」

言って、瑠璃也は再びアイ스에口をつけた。

その夜の夢は、いつもとは少し違っていた。

——いつもと同じ暗闇。

——いつもと同じ、昔の自分。

けれど、一人ではなかった。兄である洋が傍に居た。美樹がかつての姿を留めているように、やはり洋もその顔へ未成年の幼さを残している。

月も、星も、そして雲すら浮かばぬ暗い空の下で、洋は泣きじゃくる妹の肩を抱いていた。

姿は見えぬというのに、不気味な鴉の鳴き声や、野犬の遠吠えが木霊する。まるで狭い空間の中を反響するようにぐわんぐわんと響く音。足音こそ聞こえては来ないが、誰かにじっと監視されているような感覚に、美樹は怯え、泣いていた。

「美樹。大丈夫だよ。俺が守ってあげるからね」

そんな兄妹の様子を、〈美樹〉は見ていた。どこから見ているのかは分らない。奇妙なことに意識だけが切り離され、その光景を眼下に眺めていた。

美樹はふと気付いた。

兄妹の後ろにぼんやりと見える白い霧のようなものは何か？

目を凝らす——意識だけが漂っている状態で感覚などないから、目を凝らすという表現は適当でないのかもしれない。白い霧へじつと意識を集中させる。

初めのうちは、ぼんやりとした影のようにも見えた霧は、次第にその形を明瞭なものへ変えてゆく。

——人の顔だ。

誰の顔だ？

冷たい微笑。見覚えがある、気がする。

けれど美樹はそれが誰であるのか思い出すことができない。ふとした切っ掛けで判りそうだけれど、どうしても出て来ぬ相手の名をもどかしく思いながら、美樹が更にその〈顔〉を凝視しようとした時である。

急に意識が浮上した。

まるで、その記憶を取り戻すことを、美樹自身の本能が厭うているように。目を覚ませば、部屋の中はまだ薄闇に包まれていた。

カーテンの隙間から、夜の闇を照らす街灯の微かな明かりが差し込む。それだけの薄闇の中で美樹は目を大きく見開いたまましばらく天井を見つめていた。

——いつもと違う。

喉がからからに渴いている。

美樹はゆつくりと上半身を起こした。夢を思い出そうとすれば——たった今夢から覚めたばかりであるというのに——何故か頭の芯がぼんやりとして映像を結ぶことができない。

——「先ず、喉を潤すのが先か。

思い出すことの出来ぬ夢を無理に頭に浮かべようとするのは諦めて、美樹はベッドから静かに降りた。隣の部屋で眠る兄を起こさぬように、そつと部屋を出て階下を覗き込む。

（誰か、起きてる——？）

一階の廊下が、僅かに明るい。

起きているのは父か、義母か？

そろり、と足音を立てぬよう階段を下りる。光はどうやらリビングから漏れているようである。僅かに開いたドアの隙間から中を覗き込んだ美樹は、思わず顔を顰めた。

起きているのは父ではない。義母——恵子である。渴いた喉は水を欲していたが、真夜中のリビングで恵子と顔を合わせるのには、どうにも気が進まなかった。

（何してるんだらう……）

恵子はリビングの壁に掛けられたコルクボードを見つめている。そこにはメモなどに交じって古い写真が張り付けられていた。写真には貴志と洋と美樹——そして、香奈子が写っているはずである。

それは小学生の頃、家族旅行へ行った際に撮ったものだ。そこへ飾ったのは兄の洋であった。仕事で忙しく、ろくにリビングでくつろぐことなどしない父は恐らくその写真に気付いていなかったのだろう。気付いていたのであれば、恵子に対する配慮だと言って他の写真と同じように段ボールに詰めてクローゼットの中へ片付けてしまったに違いなかった。

——恵子は何をする気なのだろうか。

何を思い、自分の写っていない過日の家族写真を眺めているのだろうか。

亡くなった親友への慕情を募らせながら？

それとも、哀惜の情に目元を潤ませながら？

否。恵子は無感動に写真を眺めているだけだった。その瞳には、亡き親友を想う涙の一粒さえ浮かんでいなかった。

そればかりか、恵子は徐に写真へ手を伸ばすとピンを外さずにそのまま写真をぐいと下へ引いたのだった。ぶつり、と嫌な音がして写真がコルクボードから離れる。

次の瞬間、美樹の眸は驚愕に見開かれた。

——何をするかと思えば！

恵子はピンで裂かれた切れ目を両手で摘むと、何の躊躇いもなくその家族写真を裂いたのである。

(——！)

二枚に裂いた写真を、更に重ねて細かく引き千切る。更に、更に、小さく。

一頻り写真を千切ると、恵子はゴミ箱の上で両手をぼつと開いた。

裂かれた写真は、紙吹雪となつてはらはらとゴミ箱の中へ降り注いだ。欠片一枚すら、見逃さぬ

——とでもいう風に恵子は落ちる紙片をじつと見つめていたが、全てがゴミ箱の中へ収まるとようやく満足したように唇の端をいっと歪めたのであった。

その笑みの、何と陰険なことか。

まるで、——のようだ。

頭の中へ、不意に浮かんだ言葉に美樹は首を傾げた。

(何？)

何に、似ている？

何かに似ている。その冷たく歪む唇を、三日月の如くに細く弧を描いた眸を、美樹は知っているはずだった。

——なのに、思い出せない。

喉元まで出かかった言葉を急に失ってしまったかのような。その感覚にも覚えがあった。ついさつ

き、夢から覚めたばかりの時に、体験している。

思い出そうとしても、思い出すことの出来ない、もどかしさ——
纏れた記憶の糸を解こうと、その一本を手繰り寄せる。

——何から始まった？

悪夢だ。七年前からよく見る悪夢。

過去の自分は、そのまま七年前の自分を示しているのだろう。空と地面の境界がない、暗い世界は夜を。目の前に広がるどろりとした黒い池は母の沈んだ公園を。

(では、追いかけてくる足音は？)

——何を見た？ 何に、夢の中の自分は怯えているのだ。

つい先程見たばかりであるというのに、目覚めた瞬間に霧散してしまった夢。

義母の冷笑に感じた既視感。恐怖。

それらが何を示しているのか、美樹が絡まった記憶の核心へ触れようとした時——

ゴミ箱に視線を落としたままであった恵子がふっと顔を上げた。

美樹の気配に気付いたのか、それとも勘に告げられたのか。そのまるで温かみのない横顔が、僅かに開いたドアへ向けられるより早く、美樹はさっと廊下に身を潜めた。

リビングの明かりから顔を背ける。足音を立てずに、けれど素早く部屋へ戻らねばならない。義母に見つかってはいけないと、当たり前のようにそう思ったのだ。

暗い階段の影へ——暗闇へ、暗闇へ。

そろそろと移動しながら、美樹はその状況がいつもの悪夢と酷似していることに気付いた。後ろを、ちらと振り返る。まだ、恵子がリビングから出てくる様子はない、が。

(誰に追われている？ 誰に怯えている？)

ドツ、ドツ、ドツ、と心音が大きくなった気がするのは、恐らく気付いてしまった為だ。

美樹は、音を立てぬよう階段の真下まで移動し、顔を上げた。行く手を——明かりの消えた二階を見上げる。階段の先は、小さな出窓の付いた突きあたりだ。その壁には絵の一つも掛かってはいない——というのに。

暗い壁には白い嘲笑が浮かび、美樹を見下ろしていた。それは目蓋の裏に焼き付いた記憶であったのか、それとも闇が見せた幻であったのか。

——ああ、あれは。

はらり、と糸が解ける。真っ直ぐな一本の糸に戻る。

網膜が一つの映像を結んだ。覚えてすぐに四散した夢が形を取り戻してゆく。

七年も昔の無力な兄妹。

泣く妹。

宥める兄。

後ろで微笑んでいた白い顔こそ、引き裂いた写真を見つめる恵子のもものではなかったか。

階段の手摺りを握る美樹の手が、僅かに汗ばんだ。気付いてしまつてから急に吹き出した嫌な汗が背筋を冷やした。

膝が震える。そのまま階段を上れば、確実に音を立ててしまうような気がして美樹はのろろと手摺りから手を離れた。ぺたり、と両手を床に付いてじりじりと這うように上へ進む。

その間にも、後ろから義母が追いかけてくるのではないかという確証のない不安に襲われながらも、美樹はやつとのことです部屋の前まで辿り着いた。

一度、手の甲で額の汗を拭う。パジャマの裾で手を拭いてから、そつと音を立てぬようレバーハンドルを下に押し、ドアを開ける。部屋に足を踏み入れ――
バタン。

――もうここは自分の部屋だ。

そんな安堵で気が緩んだ所為か？

ずるりと手が滑り、ドアは思いの外大きく音を立てて閉まつた。

きゆう、と心臓を縮こまらせながら、美樹は慌ててベッドへ飛び込む。

(そうだ。あの人は――)

布団にくるまりながら、美樹はサイドボードへ目を向けた。正確には、サイドボードの上へ置かれたフォトスタンドに、である。

四つのフレームが組み合わさった立体型のフォトスタンドには、家族写真がはめ込まれている。

(お母さん――！)

「香奈子は私の親友だったの」

そう言うわりに、母に関してそれ以上の話題を口にしようとはしない恵子を母の親友だと信じたことなどただの一度も無かった。恵子は美樹や洋が幼い頃から時折家を訪れたが、二人は幼いながら「母の親友」を警戒したものであった。

母に向けられる「親愛」の張り付けられた無感情な瞳。

父に向けられる媚びたような笑顔。

父母を慕うだけで他は何も知らない純粋な子供であつたからこそ、本能的に違和感を感じ取ることができたのだろう。

美樹の目蓋の裏側に、一つの光景が蘇る。

それは忘れていた光景だ。

意図的に忘れようとしていたのかもしれない、母が死んだその時の、病院での記憶だ。

父は長椅子にぐったりと腰を下ろして母の助からなかったことを嘆いていた。

「何故だ。何故だ」

怒気すら含んだ調子でそう繰り返す父の傍らには、連絡を受けて真っ先に駆けつけた恵子がしおらしそうに立っていたのだ。

立ち読みサンプル
はここまで

「ああ、香奈ちゃん。ついさっきまで、隣で話をしていたのに——」

声を湿らせながらも——自分が貴志を慰めることがさも当然であるという風に——父の背へ馴れ馴れしく手を添える。

「母さんを助けてあげられなかった」

俯く洋に肩を抱かれながら、美樹は泣いていた。

両手で眸を擦りながら、美樹は三人になってしまった家族の間に厚かましくも割り込んできた恵子のことを腹立だしく思っ、充血した瞳を上げたのである。

睨み付けるように瞳だけを女の顔へ向ける。その表情さえ目にしなければ、次の瞬間には「帰って！」と叫んでいたかもしれない。

しかし、父の背を撫でる女の顔。その紅を引いた艶っぽい唇。そこには親友を失った悲しみなど欠片も浮かんではいなかった。それどころか、口元へはうっすらと微笑めいたものすら刻まれていたではないか。

美樹の全身を憤りよりも更に強い恐怖が支配する。得体の知れない恐怖に幼い心は容易く萎えて、出かけた言葉は全て喉の奥へ戻ってゆく。

（笑ってる）

（怖い、怖い、怖い）

（あれは——）

魔女だ。あの人は魔女だ。

幼い頃に絵本の中で見た魔女に、その微笑みはとても良く似ていた。

ボタン。

無意識の中で鼓膜が捉えたそれは、小さな音だった。

ドアの閉まる音だ。

ぐっすりと眠っていれば気にもならない——目を覚ますはずなどないほどに、小さな音だった。けれど洋はその瞬間にぱちりと目を覚ましたのだった。

（美樹——？）

そっと起き上がり、ドアを開く。廊下へ出て、階段の手摺りを掴む。身を乗り出すように階下を覗けば、ほんのりと漏れる明かりが見えた。

（恵子さんと何かあったのかな？）

そう思ったのは、妹と義母の仲の悪さを洋が知っていたからだ。

仲が悪い——勿論、洋も母の親友だったと自称する義母のことを好いているわけではない。が、それにしても、美樹と恵子、二人の間に流れる緊張感といった尋常ではなかった。